バカと魔法少女と召喚獣

野中つかさ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
バカと魔法少女と召喚獣

【Ｎコード】
Ｎ１１６１Ｙ

【作者名】
野中つかさ

【あらすじ】
いつもの様に学校に通う明久たちはある違和感に気づいた。「あれ？　あんな子この学校にいたっけ？」何と、昨日話したばかりなのに、今日は文月学園主催の体験授業だったことを忘れていたのだった！　クラス分けでＦクラスになる鹿目まどかと美樹さやか。ようやく打ち解けた暁美ほむらはＡクラスに行った。がその矢先にＦクラスは試召戦争を仕掛けた！「Ｆクラスって、結構、元気なんだね……」（ｂｙ鹿目まどか）

バカと中学生と体験授業（前書き）

この作品は二次作品です。原作者以外のブックは読みたくない、アニメ・原作を汚されたくない、作品通りに進めろや！　という方は、帰った方が良いと思われます。それでも読みたいぜぇぇぇぇぇ！！！という方は武器なんか捨ててかかってこい！

バカと中学生と体験授業

「――――それじゃ、見滝原中学の体験授業は決定さね」
「それは良いのですが……別に二年生全員ということにしなくとも良いのでは？」
「それでも良いんだけどね、最近バカジャリ共のせいで、学園の評判は駄々下がりだ。高橋先生も知っているだろ？」
「ええ」
「一人でも多く、この学園に来るためには一気に来させて興味を引かせる方が、効率は上がるさね」
「なら受験生の三年生を呼べば良いじゃないですか」
「三年生だと、進学する学校を決めている奴は多いから、ここに進学する奴もある程度ぐらいしか来ない。勿論、体験授業も開くさ。だが、それでは少なすぎるから、保障をかけた方が良い。まだ決めている奴が少ない二年に体験授業をさせて、興味を引く確立は三年と比べて格段に上がる。再来年にはその二年がこの学校に受験して来るわけさね。それに興味がでりゃ、人気も勝手に上がるさね」
「なるほど。そういうわけですか。確かにそれは効率は良いですね」
「わかったかい？　明日、見滝原中学にこちら側から二年用のテストと三年用を送る。体験授業の期限は明後日の火曜から金曜までだ。明日のＨＲにでも学園の二年生共に教えてやりな」
「わかりました」

☆

雲ひとつないどこまでも続く青空。夏が終わり、紅葉がハラハラと道端に落ちている。秋だと実感させる季節がやってきた。
「秋だねぇ……」
空を見ながら秋をしみじみと感じていると、見慣れた友の姿が見

えた。
「おはよう、秀吉」
「明久か。おはようじゃ。今日は早いのう」
毎度お馴染み、見た目はどこからどう見ても、女の子そのものだけど、戸籍上は何故か男で、爺言葉で話す、少し変わった友達の木下秀吉だ。Ｆクラスの中では多分、一番の常識人だと思う。
「今日はちょっと早く目が覚めてね。やることないから早く出てきたんだ」
「そうか。お主の姉上はどうしたのじゃ？」
「今日は仕事が立て込んでるみたいで、朝早くから出て行ったよ」
「お主の姉上も大変じゃの」
「うん。それに今週は遅くなるらしいし」
最近あまり会話が出来てないのも少し寂しいのもある。
そうだ。来週には姉さんの好きな料理でも作ってあげようかな。
別に今月は月末までテストないんだし。
「よ、明久」
「……おはよう、明久」
後ろから声をかけてきたのは、背が高く、少し細身に見えるが、ボクサーみたいな体つきをして、小さい頃、神童と呼ばれていたらしい僕の悪友の坂本雄二と、いつも盗撮、盗聴をして女子の写真を撮ったりするムッツリスケベな土屋康太。皆からは、寡黙（ムッツリ）なる性識（ーニ）者と呼ばれている。
「おはよう、雄二。ムッツリーニ」
「珍しいじゃないか。明久がこんな時間に学校に来るとは」
「うん、朝早くおきて暇だったからね」
いつもの友人たちと和気藹々と雑談しながら学校に入った。

☆

「明日から今週の金曜まで、見滝原中学校の二年生が、体験授業を

受けることになった」
ＨＲ（ホームルーム）の予鈴が鳴り始まるなり、鉄人……もとい、西村教諭の姿が現れたと思った矢先に、出席をとり始めた。出席を取り終えて、すぐに明日の報告をし始めた。
「わかってると思うが、勿論この教室も使う。お前等は一様先輩だ。妙な行動は慎み、授業態度はきちんとするように」
そう告げて、鉄人は教室から出て行った。
うーん……これじゃ、授業中に寝ることが出来ないじゃないか。
それにしても……
「ねぇ、雄二。普通体験授業って、中学生は中学生で別でやるんじゃないの？」
「ほぉ、バカな明久でもそこまでわかるとは、流石にそこまでバカじゃなかったか」
「一々バカって言うな！」
中学の頃、体験授業なんかには出たことないからわからないけど、中学生と高校生は習うところが一切違うはずだ。だとしたら、一緒に授業を受けるのはおかしいと思う。
「ま、大体中学で習ったとこの復習か、中学生向けの授業をやると思うが、確かに一緒にやるのはおかしいよな。普通なら別でやるのが当然だ」
「じゃあ、何で一緒に受けなきゃならないの？」
「おそらく中学生に高校生の態度を見習えってことじゃないか？」
「だったら、別にＦクラスで授業をやるんじゃなくて、設備の良いＡクラスとかで授業を受けたらいいんじゃないの？　部屋も広いし」
「全員がＡクラスとかに行ったら、自分の地位がわからなくなるだろ。何のためのクラス分けをしてると思ってるんだ？」
「あ、そっか」
「多分、その中学生共もテストを受けてるところじゃないか？　その点数でＡからＦクラスまで分けて、ようやく自分の頭の良さ悪さを把握して、頭の悪い奴は勉強をする」

「だったら、テストの点数で決めればいいんじゃないの？」
そんなの、テストの結果を見ればわかる話しだし。
「あのな……普通のテストだったら、やっても何も特にはならないだろ。だがこの学校には試召戦争という勝負がある。勝ったら、上位クラスだったら、そのままになる。下位クラスだったら、上位クラスと設備交換。負けたら、上位クラスは、下位クラスと設備交換。下位クラスは、ランクを一つ下げることになる」
「あーなるほど。勉強をして、絶対に上に行ってやるっていう闘争心を沸かせるんだね」
「そういうこった。ま、明日になりゃ、わかる話だ」
「そうだね」
細かいことは明日教えてくれるだろう。
「お前等、席に着け」
区切りの良いところに丁度チャイムが鳴り、鉄人が入ってきた。
「今日は英語の先生は忙しいので、俺が授業をする」
また熱い授業になりそうだ。

バカと中学生と体験授業（後書き）

どうでしたでしょうか。素人ながらも書いてみましたが、評価が低いのは致し方ないと思ってます。

まどか達は次の話で登場する予定です。

次回もお楽しみに！

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1161y/

バカと魔法少女と召喚獣

2011年11月1日04時38分発行